慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アリストテレス『範疇論』の真作性再考：イザァク・フシクの真作論を駁す
Sub Title	Critical comments on I. Husik's 'The categories of Aristotle' : an attempt at reconsidering the authenticity of the categories
Author	牛田, 徳子(Ushida, Noriko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2006
Jtitle	哲學 No.116 (2006. 3) ,p.1- 40
JaLC DOI	
Abstract	This work re-examines the textual connections between Aristotle's Categories and Topics which Isaac Husik alleged in his 1952 (1904, 1939) article, 'The Categories of Aristotle,' and which have greatly influenced subsequent views in favor of the authenticity of the Categories. Some of Husik's arguments are shown to be invalid, others questionable; his conclusion is shown to lack solid foundation. This paper therefore urges the need to reopen the case against the authenticity of the Categories; attention is drawn in particular to the significant differences between the substance terminology and notion used in this treatise, and in the Sophistici Elenchi.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000116-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

アリストテレス『範疇論』の真作性再考

——イザァク・フシクの真作論を駁す——[1]

牛　田　徳　子*

Critical Comments on I. Husik's 'The *Categories* of Aristotle': an attempt at reconsidering the authenticity of the *Categories*

Noriko Ushida

This work re-examines the textual connections between Aristotle's *Categories* and *Topics* which Isaac Husik alleged in his 1952 (1904, 1939) article, 'The *Categories* of Aristotle,' and which have greatly influenced subsequent views in favor of the authenticity of the *Categories*. Some of Husik's arguments are shown to be invalid, others questionable; his conclusion is shown to lack solid foundation. This paper therefore urges the need to reopen the case against the authenticity of the *Categories*; attention is drawn in particular to the significant differences between the substance terminology and notion used in this treatise, and in the *Sophistici Elenchi*.

[1] 本稿は拙論 "'Before the *Topics*'? Isaac Husik and Aristotle's *Categories* re-visited", *Ancient Philosophy* 23 (2003), pp. 113–134 を邦訳したものである．原則として原論文に忠実であることを期したが，異なる言語による表現の違和感をやわらげるために，ある程度の意訳を行った．また，新たな注を付け加えた．後記の文献表は原論文のものである．

* 慶應義塾大学名誉教授

アリストテレス(384–322 BCE)の著作群が「コルプス・アリストテリクム」の名のもとに哲学の歴史に出現したのは，著者が没してからおよそ300年も経った西暦前1世紀であった[2]．以後19世紀にいたるまで，およそ2000年のあいだ，「コルプス」の冒頭にある『範疇論』(*Categoriae*)に関してとりたてて言うほどの偽作の疑いは起こっていない[3]．それどころか，古代末期3世紀から6世紀にかけて輩出した新プラトン主義者の手によるアリストテレス哲学の注釈のなかで，現存するものにかぎるとしても，『範疇論』に関するものがもっとも多いのは，いかに彼らがこの小著を重要視していたかを現わすものだと言ってよい[4]．こうして，さしたる論争を蒙ることなく『範疇論』は近代にいたるまで自明な真作として扱われてきた．しかし19世紀に入ると，ドイツをはじめとしてヨーロッパに古代の文献研究が急激な発展をみるにいたったとき，『範疇論』の扱いはがらりと変わった．古代哲学の権威の或る者は『範疇論』全体を偽作とみなし[5]，他の者はその後半部，*Postpraedicamenta* を偽作とみなした[6]．この趨勢は20世紀に入っても，なおしばらく続いた[7]．

---

[2] ロドスのアンドロニコスによって編纂されたと言われているが，正確な時期は特定できない．アリストテレス没後，彼の哲学の知名度は非常に低かったと言われている (cf. F. Sandbach, *Aristotle and the Stoics*, The Cambridge Philological Society, 1985).

[3] 編者アンドロニコスは『範疇論』の後半部，いわゆる *Postpraedicamenta* を疑っていたと伝えられているが，削除するほどではなかったのであろう．

[4] 藤沢令夫『プラトンの哲学』岩波新書，1998年，16–17頁を参照．

[5] Brandis 1833, 257; Spengel 1845, 41 f.; Rose 1854, 234 f.; Prantl 1855, 90–91, 204 f., etc.; Gercke 1891, 424–441.

[6] Waitz 1846, 266; Zeller 1879, 67–69; Maier 1900, 291–293; Gomperz 1902, 440.

[7] Dupréel 1919, 230–251, Jaeger 1923, 45 note は著作の全体を偽作とみなした．19世紀から20世紀初頭におけるさまざまな，どちらかと言えば安易なものが多い『範疇論』偽作論はここでは必要な場合を除いて取り上げない．

イザァク・フシク[8]が20世紀初頭に『範疇論』全体の真作性を擁護する論文 'On the *Categories* of Aristotle' を *Philosophical Review* 36, 1904 に発表したのは，上に見たような近代の圧倒的な時流に逆行するものであった．彼は以下のように抱負を述べている．"シンプリキウスが引用した題名『トピカ以前の書』(*Πρὸ τῶν τόπων*) は，アリストテレスにまで遡るか否かを問わず，この哲学者の構想のなかに諸範疇を位置づける正しい考えを表明している．この論文の目的は，問題の二つの著作（『範疇論』と『トピカ』）を，かつてなされたことがないほど詳細に比較することによって，上の言明を証明することである" (101)[9]．しかし彼の見解はあまりにも時代を先取りするものであった．事実，彼の論文は34年間無視されつづけた．ようやく彼は1939年にロス (D. Ross) の積極的な支持を得て，補足論文 'The authenticity of Aristotle's *Categories*' を *Journal of Philosophy* 36, 1939 に掲載することができた．そのなかで彼は前作を注目するよう促し，新しい批判者――デュプレエルとイェーガー――に対して『範疇論』を擁護した．それでも世は彼をただちに認めることをしなかった．20世紀中葉に，マンシオン (S. Mansion) とデ・リーク (L. M. De Rijk) のあいだにこの著作の真偽論争，とくに『範疇論』と『形而上学』における実体論をめぐる論争が起こったが[10]，いずれの論者

---

[8] いまは知る人も少ないイザァク・フシク (1876–1939) には，没後出版された論文集 *Philosophical Essays by Isaac Husik* (M. C. Nahm & L. Strauss eds., Oxford, 1952) がある．そのなかに収録された論文 'The Categories of Aristotle' (pp. 96–112) は1904年に書かれた論文と1939年に書かれた補足論文を併せたものである．以下の引用の算用数字はこの版による．

[9] '*Πρὸ τῶν τόπων*' については，とくに H. B. Gottschalk の考証，'Did Theophrastus write a Categories?' *Philologus* 131, 1987, pp. 249–251 を参照．

[10] マンシオンが『範疇論』と『形而上学』のあいだに実体概念の特徴に相違があることを強調することで前書の偽作性を主張したのに対して，デ・リークは実体概念についてのアリストテレスの考えには『範疇論』から後期『形而上学』第7巻に向かう展開を跡づけられると主張して前書を擁護した．Cf. Mansion 1949, 337–340; De Rijk 1951, 141–149.

もフシクの業績を知っていたとは思われない[11].

しかしフシクの役割の重要性は20世紀の後半にさしかかるとようやく知られるようになった．たとえば，1973年にクレーマー (H. J. Krämer) は，彼の仕事が『範疇論』と『トピカ』の非常に密接な関係を明示し，したがってまた *Postpraedicamenta* を含む『範疇論』が早期の作であることを確立することで，この作品の真作性を決定的に示したと断定している[12]．1981年に開催された第9回シンポジウム・アリストテリクムにおいて，すでに既成事実となったかのような『範疇論』の真作性はいわば勝利宣言されたと言ってよいであろう[13]．この主役を演じたフレーデ (M. Frede) はその発表論文のなかで以下のように述べている．“思うに，なによりもフシクが示した事実は決定的である．言葉と内容においてこの著作は『トピカ』にきわめて近いので，私の考えによれば，両書を同一人の作とせざるをえない——もしこの同一視に対するとりわけ重大な異議があるのでなければ……しかしこうした重大な異議があるとは思われない．歴史上この著作に対して起こされた異議申し立てはことごとく十分に解明されている……”[14] この権威的な宣言はいまだに挑戦を受けずにいる．

フレーデの論文はフシクからその三つの主要な論点を取り上げている．すなわち，(1)『範疇論』の一性，(2)『トピカ以前の書』(Πρὸ τῶν τόπων) がその古い題名であること，(3) その言葉と内容が『トピカ』と親近的であることである．フレーデは (1) と (2) の論点を確立するために約

---

[11] とりわけデ・リークの『トピカ』の扱い方はフシクのそれ (98–100) と比べるとはるかに見劣りがする（1951, 154–155 を参照）.

[12] Krämer 1973, 122. また Barnes, Schofield, Sorabji eds. 1979, 181（文献表）も参照.

[13] Cf. *Zweifelhaftes im Corpus Aristotelicum, Studien zu einigen Dubia*, hrsg. P. Moraux–J. Wiesner, 1983, Berlin, S. vii.

[14] M. Frede 'Titel, Einheit und Echtheit der aristotelischen Kategorienschrift' in *op. cit.* S. 25. 英訳 Frede 1987, 25.

3分の2の分量（第2〜第4セクション）を費やしいている[15]．(3)に関しては，彼はただ一つの議論を加えるにとどまった．それは，アリストテレスの実体論について主としてマンシオンの見解——これはフシクが知るよしもなかった——を反論するためである（第5セクション，本論注20を参照）．したがって『範疇論』の真作性を支持する現今の立場は実質的には，フシクが提出した『範疇論』と『トピカ』の親近性に関する議論にほとんど全面的に依存していると言って過言ではないであろう．

しかしながらフシクは両書の親近性を過大に誇張していると私には思われる．たとえば，実体概念の取り扱い方をみると，両書がいくつかの重要な点で異なる事実を見逃すことができない．実際，フシク自身論文の1箇所で，この問題に関して両書のあいだに或る種の不一致があることを認め，自らの趣旨に反して『範疇論』の当該箇所を『トピカ』——正確には『ソフィスト的論駁』(*Sophistici Elenchi*)[16]——より後に書かれたのではないかと疑っている．問題は『範疇論』第5章3b10-21——実体，とくに第二実体はトデ・ティ（或るこれ）[17]であるかどうか——という議論である．フシクは以下のように述べる．“*δευτέρα οὐσία περὶ οὐσίαν τὸ ποιὸν ἀφορίζει, ποιὰν γάρ τινα οὐσίαν σημαίνει*[18]［第二実体は実体の質を区分・確定する．なぜならそれはしかじかなような実体を表示するからである］という見解は折衷論[19]のようにみえる．このかぎりそれは，普遍に

[15] *Postpraedicamenta* の真作性を擁護するデ・リーク 1951, 159 でさえも，この部分を ‘a separate entity’ とみなし，これに独立した ‘Πρὸ τῶν τόπων’ の題名を与えるべきであるとした．

[16] 通常『ソフィスト的論駁』は『トピカ』の最終巻とみなされている．

[17] *τόδε τι*. これは，実体を表示または意味するアリストテレス独自の用語法である．このほか伝統的な語 *τί ἐστι*（何であるか）および *οὐσία*（ウーシアー）もよく使われる．

[18] Cf. 3b20-21. カギ括弧内は拙訳．

[19] フシクの言う折衷論——妥協の産物——というのは，名の形態（＝名詞，たとえば「人間」「動物」）によって表示される或るこれ (3b13-15) と，「白い」のように端的な，しかじかなような性質 (ibid. 18-19) の中間にあるもの——その結果，第二実体は実体的固有性のごときものになる——を指すのであろう．

トデ・ティの性格を否定する『ソフィスト的論駁』[22.178b28 ff.] の類似な議論より後のものと推測されるかもしれない”(101)[20].

フシクは率直ではあるけれども，しかし両書の不一致は，彼が認めるよりはるかに根深い．まず『範疇論』と『ソフィスト的論駁』とでは，トデ・ティそのものの意味が異なる．『ソフィスト的論駁』第22章ではトデ・ティは，まさにトデ・ティであるところのもの (*ὅπερ τόδε τι*) と等値なものとして使われている．つぎの二文を比較されたい．「すべてについて共通に述語づけられるものをトデ・ティである，と同意してはならない」(179a8–9)[21]．「それ（普遍的人間）が，まさにトデ・ティであるところのものである，と（誤って）承認すること」(179a4)[22]．「まさにトデ・ティであるところのもの」は，『形而上学』vii 4.1030a3–6 で実体的本質とみなされる一方で[23]，『分析論後書』第1巻の多くの箇所で属性と対比

[20] この点について，フレーデは異なる議論を提出する．彼は『トピカ』の存在論（すなわち実体論）は『範疇論』のそれとほとんど異ならないと主張する．彼によれば，*Top.*i9. 103b27f. においては個別的対象も，その類種も実体とみなされる一方で，*SE* 22.178b38ff. では類種はトデ・ティであると認められない——すなわち，類種は個別的実体と同じ存在論的身分を与えられない，というのである (Frede 1987, 27)．フレーデによれば，このことは『範疇論』における第一実体および第二実体との対応を含意することになる．しかし彼の解釈は理解し難い．『ソフィスト的論駁』は，それぞれの普遍は性質か，分量か，関係か，その他類似なものを表示する，と主張し (178b38–39, 179a9–10)，そのことによっていかなる普遍に対しても端的に実体的性格を拒否しているのである．したがって，一方の箇所で個別的実体がその類種より優先することが示されておらず，他方の箇所で普遍がたんなる属性としてしか認められていないのに，そこからどうしてあのような第一および第二の実体との対応が導出されるのだろうか？　フレーデは彼の議論を偽作論者マンシオンの主張に対する反論とする——アリストテレスの存在論的思想はこれらの初期の著作から『形而上学』へ根本的に変化を遂げた，と (1987, 25–27)．しかしフレーデの新たに提出した議論がきわめて疑わしい論拠に基づいているのは明らかであろう．

[21] *οὐ δοτέον τόδε τι εἶναι τό κοινῇ κατηγορούμενον ἐπὶ πᾶσιν.*

[22] *τὸ ὅπερ τόδε τι εἶναι συγχωρεῖν.*

[23] 「なぜなら，まさにトデ・ティであるところのものは本質 (*τὸ τί ἦν εἶναι*) だからである．これに対して，或るものが他のものについて語られるならば，その或るものはまさにトデ・ティであるところのものではない．たとえば，白い人間はまさにトデ・ティであるところのものではない．いやしくもトデ（これ）ということが実体にのみ属するのであるなら」(Jaeger's edition OCT).

される実体の自己規定性格とみなされている[24]．しかるに『範疇論』には，まさにトデ・ティであるところのものと等値であるようなトデ・ティの概念はまったくないし，それを示唆するようなところもない．そこでは，第一実体がトデ・ティを表示するのは，表示されるものが不可分で，数において一つだからである，と述べられている (3b12–13).

ここからわれわれは，二つの著作においてトデ・ティが類種ないし普遍から区別される仕方が異なるのをはっきりと見ることができる．『ソフィスト的論駁』では，トデ・ティは，無条件的にまさにトデ・ティであるところのものなのであるから，たんになんらかの属性，性質なり分量なり関係なり，を表示すると言われる普遍から区別されなければならない (cf. 178b38–39. 179a9–10). これに対して，『範疇論』においては，トデ・ティとしての第一実体は，その数的一性のゆえに，多くのものに適合する類種から区別される (cf. 3b16–18). しかしそれにもかかわらず，第一実体は，その類種，あるいは第二実体の質化を受けざるをえないような，たんなる個別的受容体にすぎない．こうした考え方は先に見た『ソフィスト的論駁』のそれとまったく異なる．

以上の相違は哲学的にいかなる意義をもつか．『ソフィスト的論駁』の

[24]「実体（ウーシアー），すなわちおよそトデ・ティを表示するものは，他なるものであることなく，まさにそれであるところのもの (*ὅπερ ἐστί*) である」(4.73b 7–8),「木は，まさに木ないしまさに或る木であるところのもの (*ὅπερ ξύλον ἢ ξύλον τι*) とは他なるものであることなく，白くなった基体である」(22.83a13–14),「他なるものであることなく，白くあるようないかなる白いものはありえない (ibid. a32). Cf. ibid. 73b6–7, 81b27–29, 83a25–28. a28–29; *Physica* 188a 8–9; *Metaph.* 1007a33, 1087a34–35. アリストテレスが *ὅπερ τόδε τι* でもって語源的になにを意味しようとしていたかは明らかであろう．それは *τόδε τι* と *ὅπερ ἐστί* よりなる合成語であって，後者は疑問文 (what is it?) が強調名詞句 (just what it is) に替わったものである．*τόδε τι*（或るこれ）と *τί ἐστι*（何であるか）はアリストテレスの範疇の第一のもの，実体，の等しい呼び名であるから，両者は *ὅπερ τόδε τι ἐστίν* として完全に合体できる．ロス (1953, II, 159–160; I, lxxxviii) は「実体」(*οὐσία*) に二義を認め，一つは *τόδε τι*（或るこれ）＝個＝第一実体であるのに対して，他は *τί ἐστι*（何であるか）＝普遍的本質＝第二実体であると主張するが，私は賛成できない．

当該箇所のなかで仄見えているのは，思うに，自己規定性という実体の真髄である．それのゆえにいかなる実体も，他のいかなるものの述語となることも，内属者となることもなく，かえって他のものを——述語としてであれ，内属者としてであれ——自らの属性としてもつことができる．これに対して，『範疇論』における第一実体はこのような性格をまったく欠いている．この書の作者が強調してやまない第一実体における究極の基体性格は，ただ第一実体の個別性格——その類種によって質化されなければ無規定であるような裸の個別性格に依存している．このような個別性はそれ自体として基体に実体の資格を与えるだろうか．ひとはおそらく否定するにちがいない．しかし事実はそれに反して，『範疇論』がアリストテレスの実体概念の解釈に強い影響を及ぼしつづけたことを示している．たとえば，1984年に改訂されたオクスフォード版（Barnes訳）は『ソフィスト的論駁』の当該箇所の「トデ・ティ」と「まさにトデ・ティであるところのもの」を ‘an individual’（個）と訳している——ここの文脈のなかに ‘individuals’, ‘individual men’ と正当に訳される ‘*τοὺς καθ' ἕκαστον*’ (178b37) があるにもかかわらず．私はトデ・ティが個別的な対象を指示することを否定するつもりはない．しかし「トデ・ティ」と「まさにトデ・ティであるところのもの」を「個」と訳すならば，深刻な誤解を招くのは明白であろう．

この論考の発端となったのは，以上の問題がもたらす不都合さである．すなわち，現今でもなお隆盛な，いわゆる“アリストテレス発展史”に賛同する者の多くは『範疇論』と『トピカ』をアリストテレスのほぼ同時期の早い作品とみなすのであるが，こうした立場からすれば，これほど異なる実体論をどのように整合すればよいか——およそありそうにもない劇的な心境の変化を推測でもしないかぎりは——困難だと思われるのである．したがって，この事実は『範疇論』の素性を抜本的に見直させると私は信じる．私自身の意見はと言えば，この証拠はアリストテレスが『範疇論』

の原作者であることに大きな障害になる，したがってこの書はのちの或るペリパトス派の教師によって編まれた初心者用のマニュアルであった可能性がいっそう大きい，というものである．しかしながら，本論の目的は，この著作の作成時期および「コルプス・アリストテリクム」におけるその位置に関する他のあらゆる可能な仮説[25]を排して，上述の特殊な結論を論じることではない．本論はもうすこし慎重に，『範疇論』と『トピカ』の関係に関するフシクの主張を批判することでもって，この問題の論議のためにできるかぎり堅固な根拠を提出しようとするものである．以下私は，『範疇論』の真作性を支持する現代の傾向を作り出すのに大きく貢献したフシクのさまざまな議論を吟味し，それらの議論がフレーデやクレーマーが判断したほど決定的なものでないことを明らかにしたいと思う．

私の主要な関心は，上にも示したとおり，『トピカ』と『範疇論』の（広義の）論理的関係にある．しかし私の議論の表現語句は或る程度フシクのそれに同化させられるだろう．彼の主張は同時に論理的で，かつ年代学的である．つまり，『トピカ』の多くの箇所が『範疇論』を前提しているという理由で『範疇論』は真作であり，かつ『トピカ』より早い時期に属する，というのが彼の主張である．したがって私の応答も同じ枠組みに多かれ少なかれ支配されざるをえないであろう．しかしこのことは，私が『範疇論』の年代に関してなんらかの特定な仮説に係わることをけっして意味しない．

また，私は両書の純粋に文体的な相似性を扱うつもりもない．シュペンゲル，プラントル，ローゼのような19世紀の学者たちがこぞって『範疇論』の非アリストテレス的言語特徴を指摘したのに反論して，フシクは

[25] たとえば，『範疇論』は『トピカ』より後に書かれたけれども，発表の順序のために『トピカ』の前に位置づけられた真作であるかもしれない――『分析論後書』と『分析論前書』の関係がその可能な類例である――，という批評は不可能ではないだろう．しかし昨今さすがの“発展史”も息切れがしてきた感じは否めない．Cf. Burnyeat 2001, 87–125.

『トピカ』には『範疇論』との文体，語調の相似性があり，さらに同じ語や句がしばしば現われるのを示している (100–102). こうした文体比較を私が無視する[26]理由は単純である．フシクがあげた一つの例を考えてみよう．『範疇論』3. 1b16–17 と『トピカ』i15. 107b19–21 はほとんど同じ語句である[27]．この場合，われわれは二通りの説明がひとしく道理にかなうと認めなければならない．これらの語句の両方とも同じ著者が書いたと言うのと，異なる著者が一方を写し取ったと言うのと，はたしてどちらがいっそう尤もかという理由はないのである．これは一般に両書のあいだの言語的類似性に当てはまることである．純粋に言語的な比較は『範疇論』の真作性も偽作性も証明することは難しいと言わなければならない．

したがって，私はフシクによってなされた二つの著作の内容比較を調査することに集中したい．言語表現に言及するときは，その内容から離れ難い場合にかぎる．フシクの議論は 18 を数える[28]．そのうち，最初に，反論を許すと見られる 6 つを取り上げる (A)．つぎに，疑問の余地がある 9 つを取り上げる (B)．最後に，判断を留保する 3 つの議論を述べる (C)．以下，フシクの各個別議論，あるいはその主要な部分を引用し，それについてコメントする．

A　反論可能な議論

(1) 「基体について語られる」と「基体のうちにある」の区別: *Cat.* 2.1a20–b9.

“『範疇論』1a20 et seq. に述べられている「基体について語られる」(*καθ' ὑποκειμένου λέγεσθαι*) と「基体のうちにある」(*ἐν ὑποκειμένῳ εἶναι*) の区別は，『トピカ』127b1 et seq. で既知の

[26] もちろん真作と認められた作品間の文体比較はそのかぎりでない．
[27] 以下 B(4), 注 60 を参照．
[28] これらは『範疇論』のほとんどすべての章を網羅している．

事実として受け入れられている：「さらに，与えられた類が基体としての種のうちに語られるかどうか――たとえば，雪における白のように――を見ること．そうすれば，あきらかにそれは類ではないであろう．なぜなら類はただ基体としての種について語られるだけであるから」(126a3, 144b31 をも参照[29])．しかし奇妙なことに，これらの区別のあとでアリストテレス自身が 132b19 et seq. においてこれらを互換的に使っている”(104).

このよく知られたポイントを同定したのは，おそらくフシクが初めてであろう．しかし彼は問題を掴み損ねていると私は思う．『トピカ』iv6.127 b1–4 の議論は以下のようなものである．論敵がたとえば白を雪の類として与えたならば，あなたは白が雪のうちに（あると）語られるかどうかを調べなければならない．もし語られるならば，あきらかに白は雪の類ではないであろう．なぜなら類はただ基体としての種について語られるだけであるから．ここで『トピカ』は，類は種について語られるのみであるのに対して，付帯性は種について語られる（たとえば“雪は白い”）のみならず，種のうちに（あると）語られもする（たとえば“白は雪のうちにある”）と，類を付帯性から区別しているのである．さもなくば，白が雪の類に取り間違えられるはずもなかろう．あきらかに『トピカ』が使用する区別は『範疇論』で使用される「基体について語られる」と「基体のうちにある」の区別ではない．それは「基体について語られる」と「基体について語られもするし，基体のうちにあると語られもする」の区別である[30]．それゆえ，『トピカ』が v4.132b20–33 で「…について語られる」と

[29] これらの箇所は (1) の論点とは無関係のようにみえる――筆者.

[30] 『トピカ』の「基体について語られもするし，基体のうちにあると語られもするもの」は *Cat.* 2. 1a29–b2 における類似な表現と同一視されない．なぜなら前者では基体は同じもの（e.g. 白いに対する雪）であるのに対して，後者では異なるもの（e.g. 知識に対する魂と特殊な読み書き術）だからである.

「…のうちに（あると）語られる」を互換的に使うのはけっして奇妙なことではない．なぜならそれは固有性 (*ἴδιον*) を，基体について語られもするし，基体のうちにあると語られもするものとして扱っているからである．

したがって，『トピカ』が『範疇論』の「基体について語られる」と「基体のうちにある」の区別——これは 1a20–b9 を通じていささかの変更もない——を既知のものとして受け入れているとは主張できない．

(2) 類，種，個の論理的ヒエラルキー：*Cat.* 3.1b10–15.

“『範疇論』3.1b10–15 は『トピカ』iv1.121a20–26 とほとんど同じ考えを表明している．前者は，種について真であるすべてのものは種のもとに包摂される個についても真である (*ὅσα κατὰ τοῦ κατηγορουμένου λέγεται, πάντα καὶ κατὰ τοῦ ὑποκειμένου ῥηθήσεται*[31])，と述べる．後者は，種が妥当するどんなものにも類もまた妥当する (*καθ' ὧν γὰρ τὸ εἶδος κατηγορεῖται, καὶ τὸ γένος δεῖ κατηγορεῖται*[32])，と述べる．両者とも類，種，個の論理的ヒエラルキーを含んでおり，その二つの原則は (1) 類は種に妥当するのみならず個にも妥当する，(2) 種のみならず，類もまた個に属する，である．とくに注目すべき重要なことは『トピカ』においてこの原則が既知のように述べられており，特殊なケースに適用されていることである．それゆえ『トピカ』は，これらの原則が初めて述べられ，証明されたべつの著作があることを前提している” (104).

フシクは，『範疇論』1b11–12 と『トピカ』121a25–26 から引用した二

[31]「述語であるものについて（述語として）語られるものはすべて，基体についても（述語として）語られるであろう」（直訳）

[32]「なぜなら種がそれらについて述語づけられるところのものについて，類もまた述語づけられるはずであるから」（直訳）

つの相似な文および，おそらく前書 1b12–15 で示されている例——個別的人間 (*ὁ τὶς ἄνθρωπος*)，人間 (*ὁ ἄνθρωπος*)，動物 (*τὸ ζῷον*)——に基づいて，やや大げさな議論を展開しているのであるが，ここで『トピカ』が『範疇論』を前提する必然性はなにもないと言わなければならない．なぜなら『トピカ』の議論は「個」にまったく言及していないからである——「個」なくしては，いわゆる「ヒエラルキー」も，いわゆる「原則」も成立しえないであろう——．また「個」を間接的に示唆するところもない．種的述語の主語 (*καθ' ὧν*) として与えられている例は「非存在」(*τὸ μὴ ὄν*, *τὰ μὴ ὄντα*—a22–23, 24) である．

(3) 10 個の範疇：*Cat.* 4.1b25–2a1.

> “『範疇論』1b25sq. で枚挙されている 10 個の範疇は，アリストテレスのさまざまな著作のなかでしばしば参照される……しかしわれわれは『トピカ』103b22 以外のどこにも 10 個すべてを見ることはない．そこでは，それらが『範疇論』におけるとまったく同じ順列で並べられている．それらが定義づけられていないことは，『トピカ』で初めて取り上げられたわけでないことを示している” (106).

10 個の範疇の記載が，『範疇論』と『トピカ』以外のいかなるアリストテレスの著作にもないことは否定すべくもない事実である．しかし『範疇論』を直接参照するいかなるアリストテレスの著作がないこともまた否定すべくもない事実である——彼が自分の他の著述を直接的にも間接的にも参照するのが習いであるにもかかわらず——[33]．さらに，範疇（述語）を

[33] 『トピカ』は 162a11, b32, *SE* 165b9 で『分析論』を直接参照している．もし『範疇論』が「コルプス」における最初の作ならば，アリストテレスがこれを参照するのはきわめてありそうなことである．Ross 1957, I. lxxxii, n. 6 は，*An. Pr.* 49a7, *De An.* 402a25, 410a15 が『範疇論』への確かな参照であってよい (*may* be definite references) と微妙な言い方をしているが，疑問である．

表わす「カテーゴリアイ」という呼び名は，『範疇論』を除いて『トピカ』やその他すべての主要な著作に共通である．この著作だけが「カテーゴリアイ」の代わりに，「いかなる組み合わせにもよらずして語られるもの」という句を使う (1b25, 2a8)．したがって，『トピカ』が『範疇論』を参照することは疑わしいと思われる．

(4) 関係的なものの第二の定義：*Cat.* 7.8a31–32[34].

“第二の定義が『トピカ』で用いられているのは，142a29 と 146b4 の 2 箇所においてである．これらの箇所はそれを既知のものとして参照しているようにみえるが，とりわけ第 2 の箇所がそうである．というのは，「それぞれの関係的なものの存在はなにものかとなんらかの関係にあることと同じであったのだから」(*ἐπειδὴ ταὐτὸν ἦν ἑκάστῳ τῶν πρός τι τὸ εἶναι ὅπερ τὸ πρὸς τί πως ἔχειν*) の「…であった」(*ἦν*) という過去形は明らかに他の箇所を参照しているからである．しかしそれは『トピカ』の第 1 の箇所への参照ではありそうにもない．なぜならそこでは［定義について］いかなる種類の証明もなく，ただ容認されているだけだからである” (107–108).

『トピカ』vi4.142a27–30 は以下のように述べる．「たとえば，われわれは“二倍”を定義するのに“半分”なくしては不可能である．またおよそそれ自体としてなにものかとの関係にあると言われるすべてのものがそう

[34] 『範疇論』第 7 章は関係的なもの (*πρός τι*) を扱うが，その最初の定義が冒頭 (6a 34–35) に与えられている：*ὅσα αὐτὰ ἅπερ ἐστίν ἑτέρων εἶναι λέγεται*（それらは，まさに他のものであるところのもの，と言われる）．しかし 8a13 から実体が関係的でありうるかどうかのアポリアが示され，そのためには第一の定義が不十分であるとして，8a32 に第二の定義が与えられる：*οἷς τὸ εἶναι ταὐτόν ἐστι τῷ πρός τί πως ἔχειν*（それらの存在が，なにものかとなんらかの関係にあることと同一なもの）．

である[35]．なぜなら，すべてこの類いのものにとってその存在は，なにものかとなんらかの関係にあること同じだからである．したがって一方を他方なくして認識することは不可能である[36]」

ここにはいかなる形式的な証明もない，というフシクの主張はおそらく間違っていない．しかし，だからといってそこから関係的なものの定義がすでに容認されているはずだ，という彼の暗黙の推理は妥当しない．なぜならこの箇所の記述は十分であり，自己充足しているとみなされ，したがって定義を（非形式的に）与えることができるからである．それゆえ，『トピカ』vi8.146b3-4がこの箇所を参照することはまったく可能であると言わなければならない．

(5) 「それ自体における関係的なもの」(*πρός τι καθ' αὑτό*) と「その類における関係的なもの」(*πρός τι κατὰ τὸ γένος*) の区別：*Cat.* 8.11a23-36.

"『範疇論』11a23-36でなされるこの区別，ならびにこれが当然引きおこす問題——類はその種と異なる範疇に属することができるかどうか——が再度『トピカ』120b36 sq., 124b15 sq., 146a 36, 173b2で言及される"(108).

「それ自体における関係的なもの」という句は『範疇論』当該箇所には見出されない．また，それをibid. 11a25, 26における「まさに他のものの

[35] ここでアリストテレスが言わんとするのは以下のようなことである．定義は「より先なるもの＝より知られうるもの」によってなされなければならない (cf. vi4. 141b6)．ただこの原則が当てはまらないものの一つに関係的なものがある．それは相関者を同時なものとして本性のうちに含んでいるからである（たとえば，2倍にとっての半分）．それゆえ関係的なものの定義は相関者を含まざるをえない．

[36] *οἷον τὸ διπλάσιον ἄνευ τοῦ ἡμίσεως [οὐκ ἔστιν ὁρίζεται], καὶ ὅσα καθ' αὑτὰ πρός τι λέγεται, πᾶσι γὰρ τοῖς τοιούτοις ταὐτὸν τὸ εἶναι τῷ πρός τί πως ἔχειν, ὥστ' ἀδύνατον ἄνευ θατέρου θάτερον γνωρίζειν.*

であるところのもの」(*αὐτὸ ὅπερ ἐστιν ἑτέρου*)[37] と等値なものとしてわれわれが受け取るとしても，フシクが引用する『トピカ』の諸箇所は，彼の主張を裏付けるものではない：

a. iv 1.120b36–121a4[38], ibid. 4.124b15–22[39],『ソフィスト的論駁』13.173b1–2[40] は「それ自体における関係的なもの」と「その類における関係的なもの」の区別を用いていない．それゆえ，前2箇所が扱っている問題——類はその種と異なる範疇に属することができるかどうか——は“この区別が当然引きおこす問題”とみなされることができない．

b. iv 4.124b23–27[41], ibid. b28–34[42], vi 8.146a36-b1[43] での議論はか

---

[37] これは『範疇論』における関係的なものの第一の定義と同じ表現である．注(34)を参照．

[38]「さらに，類と種が同じ範疇分割によらずして，一方が実体，他方が性質，あるいはまた一方が関係的なもの，他方が性質であるのかどうかを注目すること．たとえば……知識は関係的なものであるけれども，善と美は性質である．したがって善または美は知識の類ではない．なぜなら関係的なものの類もまた関係的なものであるべきだからである」

[39]「もし種が関係的なものであるならば，類もまた関係的であるかどうか調べること．なぜならもし種が関係的であるなら，類もまた関係的である——ちょうど2倍と多倍の場合のように．なぜなら各々が関係的であるから．他方，類が関係的なものであっても，種もまた関係的である必然はない．なぜなら知識は関係的であるけれども，読み書き術はそうではないからである．あるいはまた先の言明さえも真ではないかもしれない．なぜなら，徳は本質的に美なるものであり，本質的に善なるものであるけれども，（種）徳が関係的であるのに対して（類）善と美は関係的でなく，性質的であるから」

[40]「この種の［冗語に関する］すべての議論は，その類のみならず，それら自身が関係的に語られる場合に起こる…」

[41]「また，種が，それ自体においてとその類においてと，同じものとの関係において語られないかどうか考察すること．たとえば，2倍が半分の2倍と言われるならば，それは半分の多倍と言われねばならない．さもなくば，多倍は2倍の類ではないであろう」

[42]「さらに，それが，その類においてと類のまたすべての類においてと，同じものとの関係において語られないかどうかを見ること．なぜなら，2倍が半分の多倍であるならば，それは半分の過多と言われるであろうから．そして一般にすべての上位の類において，半分との関係において語られるであろうから．——異議は以下である．種が，それ自体においてとその類においてと，同じものとの関係において語られる必然性はない．なぜなら知識は可知的なものの知識と言われるが，［知識の類である］性状と状態は可知的なもののそれでなく，魂のそれであるから」

[43]「もし定義されるものが，それ自体においてであれその類においてであれ，関係的なものであるならば，それの定義のうちに，それ自体においてであれその類においてであれ，その相関者が語られていないかどうかを見ること」

の区別を使用しているけれども，類と種が属する範疇の問題を扱っていない．それゆえ，これらは『範疇論』の当該箇所と無関係である．

(6) 欠如 (*στέρησις*) の定義：*Cat.* 10.12a29–31.

"『範疇論』(12a29) における「欠如」の定義は『トピカ』の以下の2箇所で参照されている：106b27: *ὅτι δὲ κατὰ στέρησιν καὶ ἕξιν ἀντίκειται τὰ νῦν λεγόμενα* [sc. *αἰσθάνεσθαι*) (*ἀναίσθητον εἶναι*], *δῆλον, ἐπειδὴ πέφυκεν ἑκατέραν τῶν αἰσθήσεων ἔχειν τὰ ζῷα*.....[44]; 143b35: *τὸ τυφλὸν γάρ ἐστι τὸ μὴ ἔχον ὄψιν, ὅτε πέφυκεν ἔχειν*[45]" (109).

『範疇論』10.12a29–31 で定義されているのは「欠如」でなくて，「欠如していること」(*ἐστερῆσθαι*) である．さらに，ibid. 12a35–b1 では，一方の相対立するものども，つまり欠如していることと所有していること（たとえば，盲目であることと視力をもつこと）と，他方の相対立するものども，つまり欠如と所有（たとえば，盲目と視力）とを厳密に区別する．しかし『トピカ』では，このような区別は見あたらない．ただ一対の対立するもの——欠如と所有——が考えられているだけである．したがって，『トピカ』のこれらの箇所が『範疇論』を参照すると主張するのは無理であろう．

B　疑問の余地ある議論

(1) ホモーニュモン (*ὁμώνυμον*, pl. *ὁμώνυμα*) の定義：*Cat.* 1.1a1–2.

---

[44]「いま語られたこと［すなわち，知覚することと無知覚であること］が所有と欠如に則して対立することは明らかである．というのは，動物が各感覚を有することは自然本来だからである」

[45]「なぜなら視力をもつのが自然本来であるとき，それをもたないものが盲目であるから」

> “『範疇論』の冒頭にホモーニュモンが定義され説明されているが，『トピカ』第1巻第15章全体がこれを扱うのに当てられる．ここではそれはまた「多くの意味をもって語られるもの」とも呼ばれる．特別な意義があるのは107a18–20である．というのは見るところ，a20に『範疇論』におけるその定義が直接言及されているからである．アリストテレスは以下のように言う[46]．一定の名によって示された諸々の類が異なり，上下関係にないかどうか，われわれは調べなければならない．たとえば，オノス(*ὄνος*)が，類である動物(*ζῷον*)および道具(*σκεῦος*)に当てはまるように，——ゆえにこれはホモーニュモンである[47]．なぜならその名によって結びつけられたこれらの類の定義は異なるからである(*ἕτερος γὰρ ὁ κατὰ τοὔνομα λόγος αὐτῶν*)”（102–103——傍点筆者）．

フシクは『トピカ』107a20のテキストを ‘for the definition of these genera as connected by the name is different’ と翻訳ないしパラフレーズしている．彼は代名詞 *αὐτῶν* が先行文の *τό τε ζῷον καὶ τὸ σκεῦος* (a19–20) を受けるとみなしているようである．しかしこの解釈を取ると，後続の文 *τὸ μὲν γὰρ ζῷον ποιόν τι ῥηθήσεται, τὸ δὲ σκεῦος ποιόν τι* (a20–21) に問題が生じてくる．すなわち，フシクの解釈に沿うと，この文の主語は *τὸ ζῷον* と *τὸ σκεῦος* でなければならない．しかしそうすると，この文は適切な定義文にならなくなるだろう．これに対して，他の訳者と同じように，原文の主語として *τὸ μὲν* と *τὸ δὲ* を取り，「すなわち，一方は

---

[46] 原テキストは以下である．107a18–20: *σκοπεῖν δὲ καὶ τὰ γένη τῶν ὑπο τὸ αὐτὸ ὄνομα, εἰ ἕτερα καὶ μὴ ὑπ' ἄλληλα, οἷον ὄνος τό τε ζῷον καὶ τὸ σκεῦος· ἕτερος γὰρ ὁ κατὰ τοὔνομα λόγος αὐτῶν.*

[47] ギリシア語のオノスは或る動物（すなわちロバ）を意味すると同時に，或る道具（すなわち巻き上げ機）を意味する．

これこれなような動物であると言われ，他方はこれこれなような道具であると言われることになろうからである」と読むべきであろう．したがって，かの代名詞 *αὐτῶν* は間接的に 107a18 の *τῶν ὑπὸ τὸ αὐτὸ ὄνομα* を受けることになる．そこでこの *αὐτῶν* は実質的に，同じ名のもとにある諸対象を指すことになる[48]．

かくて，『トピカ』107a18–21 の議論は以下のようになるだろう．「また，同じ名のもとにある諸々の対象の類がたがいに異なり，上下関係にないかどうか調べてみなければならない．たとえば，オノスが動物でありかつ道具であるように．なぜなら，この場合これらの対象にとってその名に応じた定義が異なるからである．すなわち，一方はこれこれなような動物であると言われ，他方はこれこれなような道具であると言われることになろうからである」 この議論のポイントは以下である．もし同じ名「オノス」をもつ事物の類が異なり，上下関係にないならば，その名に応じたこれらの事物の定義は異なる．したがって，オノスはホモーニュモンである．ここで『トピカ』はホモーニュモンを探索しうる一つの条件を示している．というのは，このあとただちに「しかし，もし類が上下関係にあるならば，定義が異なるなんの必然性もない」(a21–23) と付け加えているからである．

したがって，a20 の文 *ἕτερος γὰρ ὁ κατὰ τοὔνομα λόγος αὐτῶν* は明らかに上述の条件の必然的帰結に対応するものであるから，この句が『範疇論』の「ホモーニュモン」の定義に直接言及していると，あえて推測する必要はなにもないであろう．

(2)　シュノーニュモン (*συνώνυμον*, pl. *συνώνυμα*) の定義：*Cat.* 1. 1a6.

“シュノーニュモンは『トピカ』109b7, 123a27, 127b5, 148a

[48] フシクの読み ‘the genera designated by the given name’ は不適切である．

24, 162b37 で参照されている．このうち最初の箇所がもっとも重要である．それは以下のように述べる．類はその種についてシュノーニュモンの仕方で[49]述語づけられる．*なぜなら種は類の名も定義も受け入れるからである* (*καὶ γὰρ τοὔνομα καὶ τὸν λόγον ἐπιδέχεται τὸν τῶν γενῶν τὰ εἴδη*)，と．この言明はシュノーニュモンを構成する条件がすでに確立されていることを想定している．これは『範疇論』(1 a 6) の定義——*συνώνυμα δὲ λέγεται ὧν τό τε ὄνομα κοινὸν καὶ ὁ λόγος ὁ αὐτός*[50] への暗黙の参照にほかならない．さらに，『範疇論』のべつのところ，3b2 には『トピカ』とほとんど同じ語句がある——*καὶ τὸν λόγον δὲ ἐπιδέχονται αἱ πρῶται οὐσίαι τὸν τῶν εἰδῶν καὶ τὸν τῶν γενῶν, καὶ τὸ εἶδος δὲ τὸν τοῦ γένους*[51]．*Top.* 143a24 でもシュノーニュモンの同じ定義が一瞥される．そこではアリストテレスは定義論を展開するのであるが，以下のように述べている．もし論敵がホモーニュモンなものどもに対して一つの定義を与えたならば，それは正しい定義になりえない．なぜなら名が含意する一つの定義をもつのはシュノーニュモンなものどもであって，ホモーニュモンなものどもではないからである (*συνώνυμα γὰρ ὧν εἷς ὁ κατὰ τοὔνομα λόγος*)，と．ここでアリストテレスはシュノーニュモンの定義をすでに既知のもののように語っている．同様に 162b37: *καὶ ἐν ὅσοις τὸ ὄνομα καὶ ὁ λόγος τὸ αὐτὸ σημαίνει* は先行する語 *συνωνύμοις* の定義であって，［冒頭の］*καὶ* は補足説

[49] シュノーニュモンまたはシュノーニュマは中性名詞，形容詞である．副詞はシュノーニュモース (*συνωνύμως*) であるが，適切な日本語がないのでこのように訳した．ホモーニュモン，パローニュモンについても同様である．

[50]「諸事物が共通な名をもち，その定義が同じなとき，それらの事物はシュノーニュマと呼ばれる」

[51]「また，第一実体は種の定義も類の定義も受け入れる．そして種は類の定義を受け入れる」

明を導入する語である (Cf. Trendelenburg, *Elemen. Log. Arist.* 6th ed., 1868, pp. 126–127)" (103).

まず，フシクがもっとも重要とみなし，『範疇論』(1a6) の定義への暗黙の参照にほかならないと主張する『トピカ』ii2.109b7 を調べてみる．たしかに『トピカ』の語法は『範疇論』1.1a6–7, 5.3b2–4 の語法と一致，適合すると言えようが，ただし以下のことに注目しなければならないだろう．

『範疇論』はシュノーニュモンについてつぎのように例証してみせる．「たとえば，人間も牛も動物である．実際，これらの各々は共通な名によって“動物”と呼ばれ，動物のあり方の定義も同じである．なぜなら人がそれぞれの定義——それらの各々にとって動物であることとは何であるか——を与えようとするならば，同じ定義を与えるであろうから」(1a8–12)．ここで『範疇論』は「人間」と「牛」を，一つの類「動物」の下でその名と定義を共有する相互に並列的なものであるから，シュノーニュマとみなしている．同様なシノニミィは，同書 5.3b2–4 において個（第一実体），種，類といったハイラーキカルな関係に妥当しなければならない．というのは，フシクは『範疇論』の定義に関連して，この箇所を『トピカ』109b7 と同一視したからである．そして事実，同じ定義が数行下に (3b7–8) 過去形 ἦν（…であった）でもって繰り返されている．

他方，『トピカ』ii2.109b2–7 の議論は，類を付帯性のごとくに与える誤りに関するものである．たとえば，人が「白は色づけられている」とか，「歩行は動いている」と言うような場合である．しかし類を正しく与えようとするなら，むろん人は「白は色である」，「歩行は動きである」と言わなければならない．その理由は「すべての類はその種についてシュノーニュモンの仕方で述語づけられる．なぜなら種は類の名も定義も受け入れるから」(109b6–7) である．ここで『トピカ』が類と種のあいだにシ

ノニミィを意図していることは明らかである．フシクによって引用された他の二つの箇所もこのタイプのシュノーニュモンを扱っている．「種が類とホモーニュモンであるかどうか調べなければならない……なぜなら類と種はシュノーニュモンだからである」(iv3.123a27–29)，「また，類が種とシュノーニュモンでないかどうか調べること．なぜなら類はそのすべての種についてシュノーニュモンの仕方で述語づけられるからである」(iv 6.127b5–7)．さらに，種と個のあいだにも相似なタイプのシノニミィが認められる：「種は個別なものとシュノーニュモンであるから……」(vii 4.154a18)．

したがって，『トピカ』109b7 がたとえ“シュノーニュモンを構成する条件”を示しているとしても，事実それが，フシクの主張どおりに『範疇論』のシュノーニュモンの定義への“暗黙の参照にほかならない”かどうか，確かなこととは言えないであろう．

つぎに，『トピカ』vi10.148a23f. を考えてみよう．フシクは以下のように説明する．“もし論敵がホモーニュモンなものどもに対して一つの定義を用いるならば，それは正しい定義になりえない”（傍点筆者）．彼はここで *τῶν καθ' ὁμωνυμίαν λεγομένων* (a23)[52] を，ホモーニュモンな事物と受け取っている．しかし当該箇所は，一つの名辞 (*ὄνομα definiendum*) が一つの説明句 (*λόγος definiens*) によって言い換えられるという定義 (cf. 149a1–2, 101b38f.) の問題に取り組んでいるのであるから，われわれは a23 の句を，多くの翻訳者とともに[53]，「多義的な名辞」と解釈しなければならない．そうすると，次の文——論敵の誤りの理由を表わす文——は，以下のように主張していると理解しなければならない：「なぜならその名に応じた，一つで同じな説明句をもつのは，一義的な名辞だからであ

[52] 直訳すれば，「ホモニミィに従って語れられるものども」これは事物も名辞も指すことができる．

[53] たとえば，'see if he has rendered a single common account of *terms that are used homonymously*' (Barnes 1984—italics mine).

る」 それゆえここでも，アリストテレスが“シュノーニュモンの定義をすでに既知のものとして語っている”かどうか確かなこととは言えない．

私は「シュノーニュモン」そのものの概念が『範疇論』と『トピカ』において本質的に異なると主張するつもりはない．ただ，『トピカ』の多くの関連箇所がいずれも『範疇論』のシュノーニュモンの定義の例証に対応できないという事実は，それらが『範疇論』の定義を参照しているというフシクの積極的な主張に対して疑問をもたざるをえないのである．

最後に，『トピカ』viii13.162b36–163a1 におけるシュノーニュモンであるが，これには二つの異なる解釈がある．すなわち，(a)『弁論術』iii 1.1405a1–2 における「シュノーニュモン」の用法[54]と同じものであるという解釈——アレクサンドロスはこれを *πολυώνυμα* とも呼んでいる (*In Top.* 577.18)．ボーニッツはこの解釈を支持する (*Index*, s.v.2)．『ソフィスト的論駁』5.167a24 をも参照[55]．(b)『範疇論』1a6–12 における用法と同じであるという解釈——これはトレンデレンブルグが主張し，フシクによって支持されている．いずれにせよ，問題のある箇所を証明のために使うことはできない．

(3) パローニュモン (*παρώνυμον*, pl. *παρώνυμα*) の定義：*Cat.* 1.1a 12–15.

“パローニュモンも『トピカ』109b3–12 で扱われている．その扱い方は，『範疇論』におけるその定義が一見そうみえるように純粋に文法的なものではなく，先行する二つ（ホモーニュモンとシュノーニュモン）とまったく同じくらい重要な論理的意味をも

[54]「日常よく用いられている同義語とは，例えば（進む）と（歩く）がそうである．というのは，これらの語は共に通常用いられているものであり，互いに同じ意味を表わしているからである」（戸塚訳）

[55]「（ここで言う）同一なるものは，名でなく事物，また名であってもシュノーニュモンでなく同じ名である……」

つことを示している．パローニュモン的述定は付帯的 (per accidens) 述定であって，これと対比されるのが必然的 (per se) 述定であるシュノーニュモン的述定である．この箇所でもまたパローニュモンは定義されていない．その何たるかはすでに読者が知っていることとみなされている”(103–104).

フシクの議論はやや曖昧である．それは二つの論点よりなると思われる．

a. 『トピカ』ii2.109b3–12 は，パローニュモンに文法的意義（たとえば，*κεχρῶσθαι*［色づけられている］は *χρῶμα*［色］から，*κινῆσθαι*［動く］は *κίνησις*［動き］から派生的に語られる）のみならず，付帯的述語として用いられる論理的意義を与えている．このように『トピカ』によるパローニュモンの使用は『範疇論』1a12–13 における文法的定義の論理的な適用ないし展開である．

b. 『トピカ』はここでパローニュモンを定義，例証せずに用いている．したがって，『トピカ』は読者がその何たるかを『範疇論』から知ったことを前提する．

a の論点に関しては，『範疇論』の定義が些かの論理的意義も含んでいないし，また『トピカ』がその定義を参照する様子を些かもみせていない以上は，そのような緊密な関係が両書にあるとも思われない．ただしかし，こうした推測が可能であることまでは，人は拒否できないであろう．論点 b は，もしパローニュモンが『範疇論』で定義されなかったならば，『トピカ』の読者はその何たるかを理解できなかったろうということを含意する．もし「パローニュモン」が本当に読者にとって新奇な語であったならば，それは真実でもあろう．しかし事実はそうではない．パローニュモンはアリストテレス以前に前 5, 4 世紀の著名な作家によって使われている——, *φοίβωι· τὸ φοίβης δ' ὄνομ' ἔχει <u>παρώνυμον</u>*[56]（アイスキュロス

[56]「(祖母) ポイベーの名に因んで呼ばれる御子，ポイボス（アポローン）に……」

『エゥメニデス』8), *μιμητὴς δ' ὢν τοῦ σοφοῦ δῆλον ὅτι* *παρωνύμιον* *αὐτοῦ τι λήψεται*[57] (プラトン『ソピステス』268c1-2). これらの引用のなかで,「ポイボス」が「ポイベー」のパローニュモン,「ソピステース」が「ソポス」のパローニュモンであることは,『範疇論』の定義に正確に沿っている:「語尾を異にして,或る語からその名を得てくるものがパローニュモンと呼ばれる」(1a12-13).

それゆえ,パローニュモンの用法はアリストテレスの時代にはすでに完全に確立していたとみなすことができる[58]. したがって,『トピカ』の読者は『範疇論』のテキストを手にしていなくでも,たとえば,*κεχρῶσθαι λέγεται παρωνύμως ἀπὸ τοῦ χρώματος, κινεῖσθαι δ' ἀπὸ τοῦ κινήσεως* (「色づけられている」は「色」から,「動く」は「動き」からパローニュモンの仕方で語られる) という語句を理解するのは容易であったろう.

(4) 種差の理論: *Cat.* 3.1b16-20.

"種差の扱いは『トピカ』107b19sq., 144b12 sq., 153b6 において次第に展開をみせる. 最初の箇所は『範疇論』1b16 sq. と逐語的に同じである……さらに,『トピカ』のこの文章の始まり方 '*ἐπεὶ δὲ τῶν ἑτέρων γενῶν*...' (ところで...であるから...) は『範疇論』を直接参照している. アリストテレスの種差の理論は,この段階では,互いに上下関係にない異なる類の種差は種においても異なる,というものである. 上に引かれた第2の箇所 144b12 sq. では,アリストテレスはこの見解を修正して,問題の種差は,異なる類が上位の共通な類の下におかれることができないの

[57]「知者(ソポス)を真似る者である以上,その者は明らかに何か知者という語から派生した名前(=ソピステース)をもつことになるはずです」(藤沢訳,括弧内筆者)

[58] これに対して,ホモーニュモンとシュノーニュモンには,たとえそれらの語がすでに使われていたとしても,アリストテレス独自の用語法がある.

でなければ，異なる必要はない，と加えている[59]．第三の箇所153b6では，アリストテレスはさらなる条件を加える．それは，先行文における「異なる類」が反対の類を含むことを理解しなければならないことを明らかにする．というのは，その場合事情が異なるからである．もし反対の類が上位の反対の類に属するならば，それらの種差は同じであってよい．

以上の考察は『トピカ』が『範疇論』に据えられた土台の上に立ち，その構造をもっと高く，もっと広くしていくのを非常に明快に示しているようにみえる．『トピカ』を利用した後世の著作者が，論理的種差について，第一の箇所以外になにも見出さず，これを自分の著作にコピーした――とくに存在する理由のない箇所であるにもかかわらず――，と推定するのは非常に不条理な案であろう”(104-105).

『トピカ』の第一の箇所，i15.107b19-23の前半の文は，『範疇論』3.1b16-17とほとんど同じであるから，もっとも重要である[60]．しかしフシクが，この文の始まり方（これこれだから...）は『範疇論』1b16 sq.を直接参照している，と主張するのは疑問がある．なぜなら『トピカ』107b19-23の全体は構文的にも意味論的にも十分だからである．ここで三つのポイントに注目しよう．第一に，それは理由句である前文(b19-21)と

[59] すなわち，種差は，異なる類が上位の共通な類の下におかれることができるなら，同じであってよい，ということ．ギリシア語テキスト(b20-22)は「同じ種差にとって，たがいに包括しない二つの類に属することが（無条件的に）不可能なのではなく，ただ〈双方の類が同じ類の下にあるのでなければ（不可能だ）〉と付け加えるべきである」と読まれる．

[60] *Top.* i15.107b19-23: *Ἐπεὶ δὲ τῶν ἑτέρων γενῶν καὶ μὴ ὑπ' ἄλληλα ἕτεραι τῷ εἴδει καὶ αἱ διαφοραί, οἷον ζῴου καὶ ἐπιστήμης (ἕτεραι γὰρ τούτων αἱ διαφοραί), σκοπεῖν εἰ τὰ ὑπὸ τὸ αὐτὸ ὄνομα ἑτέρων γενῶν καὶ μὴ ὑπ' ἄλληλα διαφοραί εἰσιν, οἷον τὸ ὀξὺ φωνῆς καὶ ὄγκου·*

Cat. 1b16-17: *τῶν ἑτερογενῶν καὶ μὴ ἢπ' ἄλληλα τεταγμένων ἕτεραι τῷ εἴδει καὶ αἱ διαφοραί, οἷον ζῴου καὶ ἐπιστήμης·*

後文 (b21–23) の複合文である．第二に，前文のなかで初めの言明 (b19–20) は後続文 (b20–21) によって例証される．第三に，接続詞 *ἐπεί* は後文に述べられていることの理由として前文を導入する．したがって，それは『範疇論』1b16–17 を参照しなければならない必然性はない．

この種の *ἐπεί*–前文＋後文の構造はアリストテレスに多くの用例があるから，問題の箇所がその一つであることに疑いの余地はない[61]．

第三の箇所 vii3. 153b6–7 に関しては，フシクが上に記述したような“さらなる条件”をアリストテレスが加えたと主張するのはおそらく正しいであろう．しかしフシクのテキスト解釈は正しくない．彼の表現——“もし反対の類が上位の反対の類に属するならば，それらの種差はおなじであってよい”(If the contrary genera belongs to higher contrary genera, their differences may be all the same)——は，テキスト *ὧν δὲ τὰ γένη ἐναντία, οὐδὲν κωλύει τὴν αὐτὴν διαφορὰν κατ' ἀμφοῖν λέγεσθαι* (b6–7) の文法的に正しい翻訳でもなければ，適切なパラフレーズでもない．b8–10 に与えられた例に従い，もし反対の類が正義と不正，上位の反対の類が徳と悪徳であるとすれば，フシクの文“それらの種差は同じであってよい”（傍点筆者）は“正義と不正の種差は同じであってよい”を意味するのは確かであろう．しかしテキストが示しているのは，同じ種差が正義と不正について述語づけられる———一方は魂の徳であり，他方は魂の悪徳であるから——，したがって（同じ）魂のが両者（正義と不正）の定義に含まれる，ということである (b7–9)．明らかに魂の (*ψυχῆς*) は正義と不正の種差でなく，徳と悪徳の種差である，ちょうど身体の (*σώματος*) が徳と悪徳の（同じ）種差であるように (b10)．以上の不都合を避けるために，反対の類が徳と悪徳であるとすると，フシクの文は“もし徳と悪徳

[61] Cf. *Top.* 125a32–b2, 147b4–8; *Meta* 1029b22f.; *EN* 1096a23f; *EE* 1217a35f.; *Pol.* 1252a1f.（引用は省略）．このうち主文が *σκεπτέον* (*mutatis mutandis*) をとるのは *Top.* 107b21, 125b4–5, *Meta* 1029b25. *δῆλον ὅτι/ὡς* をとるのは *Top.* 147b6, *EN* 1096a27, *EE* 1217a39, *Pol.* 1252a3–4 である．

が上位の反対の類に属するならば，徳と悪徳の種差は同じであってよい”と解されよう．しかしこれはテキストの諸例に対応できない．

さらに，フシクが第三の箇所を第二の箇所の論理的発展とみなすならば，彼は大きな誤りを犯したことになる．なぜなら，「異」(*ἕτερον*) は「反対」(*ἐναντίον*) の類であるゆえに[62]，異なる類が反対の類を含んでいるのは明らかだからである．それゆえ，第三の箇所は，第二の箇所でアリストテレスが修正した見解と本質的に異ならず，たんにその特殊な適用にすぎない．

残るのは，第二の箇所 vi6.144b12–30 である．『トピカ』に種差の概念の発展があるとすれば，フシクの論点はここに成立しなければならない．われわれは以下の程度に示唆するにとどまる．(1) この概念的発展はフシクが要求するほど大きなものではない．(2) 第二の箇所の言語は複雑で，きわめて不透明である．アリストテレスは前半 (144b12–20) で第一の箇所と同じ見解を主張し，後半 (b20–30) で *ἢ* (それともこうではないか) でもって考えを中断し，前の見解を矯正しはじめる．フシクの結論は，アリストテレスが後世の著作者たちによって援用される特殊なやり方を斟酌するのに不足するようである．

(5) *ἀνὰ μέσον* (中間)：*Cat.* 10.

> “両極端の中間を，『範疇論』はつねに，『トピカ』はほとんどつねに「アナ・メソン」(*ἀνὰ μέσον*) と表現し，『形而上学』1057a 21 sq. のように「メタクシュ」(*μεταξύ*) を使わない (『トピカ』の唯一の例外は 123b14, 17, 18 である[63])” (108–109).

「アナ・メソン」を使う点では『範疇論』と『トピカ』はたがいに近く，

[62] *Top.* iv4.125a3: *τὸ δ' ἕτερον, γένος ὂν τούτων* (sc. *τοῦ διαφέρου καὶ τοῦ ἐναντίου*).

[63] 123b13 も加えるべきである．

『形而上学』からはともに遠いことは事実である．ところで，『トピカ』iv 3.123b27–30 に以下の議論がある：

「不足と過剰は同じ類のうちにある——なぜなら両者は悪のうちにあるから——．これに対して適度は両者の中間でありながら，悪でなく，善のうちにある」(*ἡ μὲν ἔνδεα καὶ ἡ ὑπερβολὴ ἐν τῷ αὐτῷ γένει—ἐν τῷ κακῷ γὰρ ἄμφω—τὸ δὲ μέτριον ἀνὰ μέσον ὂν τούτων οὐκ ἐν τῷ κακῷ ἀλλ' ἐν τῷ ἀγαθῷ*).

他方，『範疇論』11.14a1–4 に以下の文言がある：

「悪に反対なものは時として善，時として悪である．なぜなら，過剰はそれ自体悪でありながら，悪である不足に対して反対であるが，同様に中庸も自ら善でありながら双方に対して反対であるからである」(*κακῷ δὲ ὅτε μὲν ἀγαθὸν ἐναντίον ἐστίν, ὅτε δὲ κακόν· τῇ γὰρ ἐνδείᾳ κακῷ ὄντι ἡ ὑπερβολὴ ἐναντίον κακὸν ὄν· ὁμοίως δὲ καὶ ἡ μεσότης ἐναντία ἑκατέρῳ οὖσα ἀγαθόν*).

両者の思想には親近性があるにもかかわらず，明らかに『範疇論』の表現は『トピカ』よりも『ニコマコス倫理学』にはるかに近い[64]．

(6) 肯定的/否定的に示される中間：*Cat.* 10.12a20–25.

“「この中間は，或る場合には肯定的に示され (*ὀνόματα κεῖται τοῖς ἀνὰ μέσον*[65])，他の場合には否定的に示される (*τῇ ἑκατέρου τῶν ἄκρων ἀποφάσει*[66])」と『範疇論』12a20 は告げる．それからこの言明を立証すべく諸例をあげる．『トピカ』123b20 では

[64] Cf. *EN* ii8.1108b11–15:「性状が三つあるうち，その二つは悪——過剰によるものと不足によるもの——であり，その一つはそれらの中庸としての徳（善さ）であるが，これらのすべてがすべてに対して或る意味で対立している．すなわち両端は中間のものにも，相互にも反対であり，中間のものは両端と反対である」

[65] 直訳すれば「中間のものに名が定まっている」

[66] 直訳すれば「両端のものがいずれも否定されることによって［中間のものが定まる］」

この事実がすでに知られたもののように扱われている：「それとも，種の間にも，類の間にも中間のものがあるけれども，同じ仕方でなく，一方では否定の形で，他方では肯定の形であるかどうか，考察すべきである」(*ἢ εἰ ἔστι μέν τι ἀμφοῖν ἀνὰ μέσον, καὶ τῶν εἴδων καὶ τῶν γενῶν, μὴ ὁμοίως δέ, ἀλλὰ τῶν μὲν κατὰ ἀπόφασιν τῶν δ' ὡς ὑποκειμένον*（傍点，下線は筆者）. 例示はあるけれども，用語の意味は明らかにされていない”(109).

この議論でフシクは，『トピカ』iv3.123b20 における (A) *κατὰ ἀπόφασιν* と (B) *ὡς ὑποκειμένον* が，それぞれ『範疇論』10.12a20–23 における (a) *τῇ ἑκατέρου τῶν ἄκρων ἀποφάσει* と (b) *ὀνόματα κεῖται τοῖς ἀνὰ μέσον* に対応すること，そして (A)–(B) が (a)–(b) を前提しているから，(A)–(B) の意味は説明される必要がないことを主張しているようである．

(A) が (a) に対応することは，両者が *ἀπόφασις*（否定）を使用していることで明らかだと思われる．しかし (B) が (b) に対応するかはそれほど明らかにみえない．なぜなら (B) における *ὑποκειμένον* の特殊な語法は『範疇論』のどこにも見出されないし，さらに『トピカ』にはその用例が示されていないからである．それでも (A)–(a) の対応の類推によって (B) と (b) にはなんらかの対応があると考えてもよいだろう．しかし，(B) が (b) を前提し，それゆえに (B) の意味が説明される必要がない，と推定することが可能であるならば，逆の推定もひとしく可能である．すなわち，『範疇論』が *ὑποκειμένον* の通常の用法[67] と特殊な用法[68] の混同を嫌って，もっと分かりやすく「中間のものに名がある」と表現したと推定することがで

[67] 基体，主語を意味する用法．

[68] この特殊な用法が明示されているのは，『自然学』v1.225a6:「*ὑποκειμένον* でもって私が意味するのは肯定的に表明されるもの (*τὸ καταφάσει δηλούμενον*) である」においてである (cf. b3–4).

きる．そして，これを(B)の意味の説明として，また同時に(a)「両端のものがいずれも否定されることによって中間のものが定まる」というのが(A)「否定の形である」の意味の説明として推定できる．この場合は『範疇論』は(A)-(B)をすでに知っていることになるだろう．

(7)「反対なもの」(*ἐναντία*)の三分類：*Cat.* 11.14a19-25.

"「反対なもの」の三分類は，『範疇論』14a19におけると同じく，(『トピカ』iv3.123b1-12に）見出される．すなわち，(1)同じ類のうちにあるもの，(2) 反対な類のうちにあるもの，(3)反対なもの自体が類であって，けっして類のうちにないもの，である(108).

123b1以下でアリストテレスは，反対な種に関連して与えられた類の正しさをどのように調べることができるかを指摘する．それの類が問われるところの与えられた種に反対なものがある場合には，人は以下のように調べてゆかねばならない．(1) もし与えられた類に反対なものがないならば，与えられた種に反対なものが与えられた種と同じ類のうちにあるかどうかを見なければならない．*なぜなら，**もし類に反対なものがないならば**，反対なものは同じ類のうちにあらねばならないからである*．(2) もし問題の類に反対なものがあるならば，与えられた種に反対な種が問題の類に反対な類のうちにあるかどうかを見なければならない．*なぜなら，**もし類に反対なものがあるならば**，反対なものは反対な類のうちにあらねばならないからである*．最後に，(3) 与えられた種に反対な種がいかなる類のうちにもなく，それ自体類でありうる――たとえば，善のように．その場合，*与えられた種に反対な種もまた，いかなる類のうちにもありえず，**ただそれ自体が類でなければならない***――善と悪の場合，そのいずれもが類のうちに

なく，いずれもが類であるように．［ギリシア語引用文省略］ここに，三分類のすべてがことごとく見出されるのみならず，三つの可能性のそれぞれに伴い，それぞれを限定する付帯条件が規定されるのが見られるだろう．もし『範疇論』と『トピカ』のあいだに発展があるとすれば，それは疑いなく『トピカ』に向かってである”(98–99).

上の引用文(98–99)はフシクの長い議論(98–100)の中心部分である．その議論は二つの目的をもっている．一つはブランディス(C. A. Brandis)の広く普及した見解を論駁するものである．ブランディスは，『トピカ』が『範疇論』より以前のものであることを，最初の二つの種類の反対なものしか述べていない *Top.* vii3.153a35–36 と，三種の反対なものに言及する *Cat.* 11.14a19–20 との比較から立証できると考えた．もう一つのフシクの目的は『トピカ』が『範疇論』より後のものであることを，*Top.* iv3.123b1–12 に基づいて証明するためである．上に引かれたフシクのテキストはこの第二の目的——これはブランディスの見解の論駁を前提している——にとくに関わるものである．

フシクは論文の結び(111–112)で，この話題に戻って以下のように言う．

“私は，それ［ブランディスの議論の内容］がまったく真でないこと，『トピカ』が完全な分析，しかも『範疇論』よりもっと多くの説明と詳細な記述を伴う分析をしていることを示した．たしかにこれはブーメラン現象とみなされることもできよう．もし『トピカ』が「反対なもの」の詳しい分析をして，『範疇論』がただ結果についての言明のみを含むとすれば，その場合『範疇論』は『トピカ』から結果だけを写し取って，残りは省略したのだと

言えよう．それは可能だと私は認める”[69]

ここではフシク自身が相反する二つの結論が可能であることを認めている．そのどちらがいっそうありそうなことだろうか．

上にフシクによって引かれた『トピカ』123b1–12を，以下の『範疇論』14a19–20と比較してほしい：「すべての反対なものは，(1) 同じ類のうちにあるか，(2) 反対な類のうちにあるか，(3) それ自身が類であるかのいずれかでなければならない[70]」この言明は，フシクの言うもう一つの結論のほうに秤りを傾かせるように思われる．なぜなら『範疇論』の簡明な言明の強い断言的口調は，『トピカ』で反対なものの三つの可能性の条件を定める詳細な分析をすでに既知のものとして前提し，これを締め括っているようにみえるからである．

(8) 「対立するもの」(*ἀντικείμενον*)，「同時」(*ἅμα*)，「後(あと)のもの」(*ὕστερον*): *Cat.* 10, 12, 13.

“また『トピカ』131a14–15には，『範疇論』を思い出させるものがある．そこでは，アリストテレスは固有性(*ἴδιον*)について以下のように述べる．対象と対立するものであれ，本性上同時にあるものであれ，あるいは後(あと)のものであれ，それを必然的に伴う名辞や句を，対象の固有性に当てはめることは適切でない．とい

---

69 これを，フシクはブランディスとの論争の文脈において容認して，以下のようにつづける：“しかしこのことはブランディス，ツェラーやその他ブランディスに加担するグループを救うことにはならない．というのは，彼らはいっそう進歩した見解をもつ作品が時間的にあとの作品だという考えに立っているようだからである．いずれにせよ，『トピカ』がより初期であるといういかなる*証明*について人は語ることができない”(ibid.).『トピカ』iv3に三種の「反対なもの」の考えが存在することが，ブランディスを論駁するのに事実上十分である．しかしわれわれの関心はもっぱら『範疇論』がより先であるとするフシクの積極的主張が有効かどうかをめぐるものである．

70 *ἀνάγκη δὲ πάντα τὰ ἐναντία ἢ ἐν τῷ αὐτῷ γένει εἶναι ἢ ἐν τοῖς ἐναντίοις γένεσιν, ἢ αὐτὰ γένη εἶναι.*

うのは，それら（三つ）はものをいっそう明瞭にすることがないのに対して，固有性が用いられるのはいっそうの明瞭さのためであるからだ，と．ところで，これらの三つの主題 *ἀντικείμενα, ἅμα, ὕστερον* が事実，継続的に同じ順序ではないけれども『範疇論』(11b16, 14a26, 14b24) で論じられていることに注目すべきである．

……また，アリストテレスならざる *Postpraedicamenta* の作者が『トピカ』に依拠しそうにもないと考えさせるものがある．彼は「同時」を扱うさいに，「本性上同時」の一つのクラスとして「対立するもの」を含めていないが[71]，もし彼が『トピカ』131a 16[72] あるいは 142a24[73] を目にしていたなら，そうしたはずである”(109).

フシクが認めるように，『トピカ』v3.131a12–26 では「対立するもの」，「本性上同時にあるもの」，「後のもの」は，物事をいっそう明瞭にするための固有性 (*ἴδιον*) と関連して扱われている．しかし『範疇論』10 章，12 章，13 章のどこにもそれら三者が固有性や物事をより明瞭にする問題と関連づけられていない．さらに，『範疇論』12 章で実際に論じられているのは，フシクが主張する「後のもの」でなくて，「先のもの」(*πρότερον*) である．前者はたった一度 14a38 で後者に付随する形で現われるにすぎない．それゆえ，『トピカ』に『範疇論』11b16, 14a26, 14b24 を思い出させるものがあると推定させる強い理由はない．

『範疇論』13 章における「本性上同時」の定義のなかに，典型的な関係的なものである二倍と半分が例として引かれている (14b20–31)．同書 10

[71] *Cat.* 13.14b27ff.
[72]「なぜなら対立するものは（相対するものと）本性上同時であるから」
[73] 同上.

章 11b17–21, b24–33 で「関係的なもの」は「対立するもの」の一種であるとすでに述べられている．かくて，“アリストテレスならざる *Postpraedicamenta* の作者”が「本性上同時にあるもの」のクラスから「対立するもの」を除外する意図があったとは，すくなくとも例として関係的なものをあげている以上はけっして確かなこととは言えない．

(9) 運動変化の六つの種類：*Cat.* 14.15a13–14.

“最後にもう一つ，『範疇論』の真作性を拒否する人びと…の声高な議論がある．それは，アリストテレスが『自然学』で与えたような三種，あるいはせいぜい四種の運動変化ではなくて，六つの種類の運動変化が（『範疇論』で）言及されていることである…枚挙される種類はここと『自然学』とで同じであって，相違はただ「生成」(*γένεσις*) と「消滅」(*φθορά*)，「増大」(*αὔξησις*) と「減少」(*μείωσις, φθίσις*) を二つと考えるか，四つと考えるかという点にあるので，この著作を真正とするわれわれの確信を揺らがせるほどの論拠は薄い．かえってまさしくこの特殊性が私の立場をいっそう強固にすると思われる．なぜなら，第一に，すでに上に示したように[74]，アリストテレスにおいて *αὔξησις*（増大）の反対[75] は，他の著作では *φθίσις* であるのに対して，『範疇論』と『トピカ』では *μείωσις* である．この語が『トピカ』から『範疇

[74] “増大に対立するものは，アリストテレスの自然学的および形而上学的著作のなかではつねに *φθίσις* であるが，『範疇論』(15a13–14) と『トピカ』(122a28) では *μείωσις* である…*φθίσις* が *μείωσις* によって定義される場合があるが（『生成消滅論』320b31: *ἡ δὲ φθίσις μείωσις*'），それは，いっそうよく知られるものによってそうでないものが定義されるからである．このことは，一般向けの著述である『トピカ』においてこの種の語が使われることを非常によく説明できる．そして『範疇論』も同じ性格のものである．その他の運動変化の種類が『トピカ』で言及されていないので，（この語を）『範疇論』が『トピカ』から借用した可能性はない”(102).

[75] すなわち「減少」.

論』によって借用されることはありそうにもない．なぜなら運動変化の種類の完全なリストは『トピカ』のどこにもないからである．第二に，『トピカ』の二つの箇所から理解されるのは，この書を著した時期にはアリストテレスは *αὔξησις* と *μείωσις* とを二種の運動変化とみなし，*γένεσις*（生成）と *φθορά*（消滅）を同様に二種とみなしていたらしいことである．それらの箇所は以下のように読まれる．「たとえば，（魂が）増大したり，あるいは消滅したり，あるいは生成したり，あるいはその他の種類に応じて運動変化できるかどうか」(111b7)，「そこでもし歩行が増大も，減少も，その他の運動変化も分かちもつことがないならば……(122a28)”(109–110).

フシクが着目するように，『範疇論』と『トピカ』は '*μείωσις*' の語使用において共通で，運動変化の種類の数え方が似ているという 2 点において，『自然学』や『形而上学』と相違するのは事実である．

しかしフシクは一方で，“この語 (*μείωσις*) が『トピカ』から『範疇論』によって借用されることはありそうにない．なぜなら運動変化の種類の完全なリストは『トピカ』のどこにもないからである”(110) と述べながら，他方で“その他の［すなわち，増大と減少以外の］運動変化の種類が『トピカ』で言及されていないので（この語を）『範疇論』が『トピカ』から借用した可能性はない”(102) と断定している．後者の言明はあきらかに偽である．なぜなら「消滅」と「生成」は *Top.* ii4.111b7 で，「移動」(*φορά*) と「質的変化」(*ἀλλοίωσις*) は ibid. iv1.121a31–32 で，「増大」と「減少」は ibid. 2.122a28 で言及され，最後に「場所の変化」(*κατὰ τόπον μεταβολή*) は「移動」よりも範囲が広いと ibid. 122b31–32 で述べられている．さらに，前者の言明——『トピカ』に運動変化の完全なリストがないという——もまた説得的でない．上の諸例が示すように，勤勉な読者な

らば，111b7から122b32までに*μείωσις*を含む当該の語を見出すのはそれほど難しいことではなかったであろう．したがって，『範疇論』15a 13–14にある運動変化の六つの種類のリストは，『トピカ』でとくに系統立って提示されていないものを集計しただけのものという可能性をひとは否定できない．

C　判断留保の議論

残る三つの議論については，テキストに基づく批判は不可能であるように思われる．

(1) *Cat.* 7.6b28 ff.: 関係的なものとその相関者のあいだの相互関係に関して *Top.* iv4.125a5, vi12.149b4 ff., b12と比較する議論 (108).

(2) *Cat.* 8.10b26–11a2: *τὸ μᾶλλον καὶ ἧττον*（より多く，より少なく）を受け入れるという問題と，*τὸ κατ' ἐκεῖνο λεγόμενον*（それに基づいて語られるもの）という句に関して *Top.* iv6.127b18–25と比較する議論 (108).

(3) *Cat.* 13.14b33: *ἀντιδιῃρημένον*（等位分割項）の語とその定義に関して *Top.* v6.136b3; vi4.142b7; 6.143a34と比較する議論 (109).

これらのうち，(1)と(2)はたとえ反証できないとしても，説得性に欠ける．(3)は議論として有効であろう[76].

[76] 『範疇論』と『トピカ』のあいだにフシクが見落とした関係を論じることは，この論文の範囲に収まらない．その一例をあげれば，『範疇論』8.8b27–29は性状(*ἕξις*)——徳や知識がこれに属する——を，状態(*διάθεσις*)から，前者は持続し安定したものとして，後者は容易にすばやく変化するものとして，区別している．さらに，後者は前者よりもっと広い範囲に及ぶと言われる (ibid. 9a10–11). しかしこれらの区別は『トピカ』のどこにもなされていない．逆に『トピカ』は両者を同一視しているようである．「なぜなら双方，徳と知識はともに同じ類のもとにある．なぜならそれらのいずれも性状であり，状態であるから」(*Top.* iv 2.121b37–38).「なぜなら知識自体も，その類——たとえば状態と性状——も，なにかの（という属格名詞）をとるからである」(ibid. 4.124b39–125a1). 明らかに『トピカ』は『範疇論』を前提していない．

この論文の主たる目的は，はじめに述べたように，フシクの諸議論，とりわけ二つの著作の内容に関する議論を批判することであった．彼は，『範疇論』と『トピカ』が相互に非常に緊密であることのみならず，また前者は後者によってしばしば参照され，前提とされており，それゆえ前者はアリストテレスの真作でありかつ後者より早い時期のものであることを主張している．しかしながら，いずれの主張も厳しい吟味に耐えられるものではない．フシクのあまりにも多くの議論は，その詳細な推敲にもかかわらず堅固な根拠を欠くことが示された．そこから得るものは大きい．まずこの論文の導入部で『範疇論』真作性に関する現代の想定がどれほどフシクの影響に依存したかが示された．また『範疇論』に見出される実体論が『ソフィスト的論駁』におけるそれと著しく異なること，そして後者の健全な解釈を妨げていることも示された．したがって『トピカ』とのいかなる仮設的な関係とかかわりなく，それ自体として『範疇論』を評価し直すべき緊急の必要があると思われる．その結果，『範疇論』真作性とたたかう哲学的議論の力を認めていた，たとえばシュザンヌ・マンシオンのごとき，20 世紀の数少ない哲学者が名誉を回復することは間違いないであろう[77]．

使用文献

Barnes, J. (ed.) 1984. *The comlete Works of Aristotle, the revised Oxford translation.* Princeton: Princeton University Press.

Barnes, J., Schofield, M., Sorabji, R. (eds.) 1979. *Articles on Aristotle 3.* London: Duckworth.

Brandis, C. A. 1833. 'Über die Reihenfolge der Bücher des aristotelischen Oganons' *Abhandlungen der Berlin. Akademie*: 249–299.

[77] 原論文の作成のため十年余にわたって協力の労を惜しまれなかった故藤沢令夫京都大学名誉教授に深い追悼の念を捧げる．またニール・マクリン慶應義塾大学教授には原論文の作成のさいに大変お世話になったことをあらためて厚く感謝したい．

Burnyeat, M. 2001. *A Map of Metaphysics Zeta.* Pittsburg: Mathesis Publications.

De Rijk, L. M. 1951. 'The Authenticity of Aristotle's *Categories' Mnemosyne* 4, ser. iv: 128–159.

Dupréel, E. 1919. 'Aristote et le traité des *Catégories' Archiv für Geschichte der Philosopie* 22: 230–251.

Frede, M. 1987. 'The Title, Unity, and Authenticity of the Aristotelian *Categories'* (transl. from 'Titel, Einheit und Echtheit der aristotelischen Kategorienschrift' 1983) 11–28 in *Essays in Ancient Philosophy.* Oxford: Clarendon Press.

Gercke, A. 1891. 'Der Ursprung des aristotelischen Kategorien' *Archiv für Geschichte der Philosopie* 4: 424–441.

Gomperz, T. 1902. *Griechische Denker III.* Leipzig: Veit & Comp.

Husik, I. 1904. 'On the *Categories* of Aristotle' *The Philosophical Review* xiii: 514–528.

Husik, I. 1939. 'The authenticity of Aristotle's *Categories' Journal of Philosophy* xxxvi: 427–431.

Husik, I. 1952. 'The *Categories* of Aristotle' (joined version of 1904 and 1939 articles) 96–112 in *Philosophical Essays by Isaac Husik* (eds. M. C. Nahm & L. Strauss) Oxford: Blackwell.

Jaeger, W. 1923. *Aristoteles, Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung.* Berlin: Weidmann.

Krämer, H. J. 1973. 'Aristoteles und die akademische Eidoslehre zur Geschichte des Universalienproblems im Platonismus' *Archiv für Geschichte der Philosopie* 55: 118–190.

Maier, H. 1900. *Die Syllogistik des Aristoteles II, 2.* Tübingen: H. Laupp'schen Buchhandlung.

Mansion, S. 1949. 'La doctrine aristotélicienne de la substance et le traité des *Catégories' Library of the Xth International Congress of Philosophy 2.* Amsterdam: 337–340.

Pickard-Cambridge, W. A. (1928[1]) 1955. *Topica and De Sophisticis Elenchis in The Works of Aristotle.* London: Oxford University Press.

Prantl, C. 1855. *Geschichte der Logik im Abendlande I.* Leipzig: S. Hirzel.

Rose, V. 1854. *De Aristotelis librorum ordine et auctoritate.* Berlin: G. Reimeri.

Ross, W. D. (1924[1]) 1957. *Aristotle's Metaphysics I, II.* Oxford: Clarendon

Press.
Spengel, L. 1845. *Münchener Gelehrte Anzeigen* xx, 5: 41–46.
Waitz, T. 1846. *Aristotelis Organon Graece I.* Leipzig: Svmtibvs Hahnii.
Zeller, E. 1879. *Die Philosophie der Griechen in ihrer Geschichtlichen Entwicklung II, 2.* Leipzig: O. R. Reisland.